

## 「神道」研究史管見

伊藤 聰

はじめに

こぼれ落ちる問題が多いことは承知しているが、述べ及ばなかつた事柄については、また別稿を期したい。

### 一、戦前の「神道」研究

本稿は、近代における「神道」研究の系譜を辿ろうとするもので、およそ三節より構成される。第一節では、戦前において「神道」研究の枠組みがどのように形成されたかを、第二節では戦前における本地垂迹と中世神道研究を、そして第三節では戦後において神道史から周辺諸分野へ「神道」研究が広がっていく様子を概観する。内容は古代・中世思想に関わる研究に重点を置いた。近世神道・国学、國家神道及び教派神道などについても言及すべきだが、紙数の都合もあり、且つ著者の専門を外れるため部分的に言及するに止め、このように構成する。

近代の「神道」研究は、「国学」の解体の中から現れてくる。「和文学科」として新しい大学制度に取り込まれた国学は、近代の学問秩序のなかで国史学・国文学・国語学に分岐していく。残されたのが、まさに「神道」に関わる部分である。

神道を以て「国家の宗祀」であり宗教にあらずと位置づける国家神道体制下にあって、純粹に学問研究の対象として神道を扱うことは難しく、このことは、久米邦武

が一八九二年に『史学会雑誌』誌上（第二編二三）（一五）に発表した「神道ハ祭天ノ古俗」なる論文によつて帝国大学教授職を追われた事件からも明らかであつた。しかしそのいっぽう、宗教ではなく「国民道德」として神道を定位しようとすることは、国家の方針に沿つたものだつたから、この方向性で「神道」研究は進められる。国民道德論の中心的論者が東京帝国大学文学部哲学科教授井上哲次郎（一八五五）（一九四四）であった。

東京大学文学部に神道講座が置かれたのは、大正九年（一九二〇）のことである。その教官となつたのが、宗教学の加藤玄智（一八七三）（一九六五）、哲学の田中義能（一八七二）（一九四六）、国史学の宮地直一（一八八六）（一九四九）である。

加藤の著作は『神道の宗教学的新研究』（一九二二）、『本邦生祠の研究』（一九三一）、『神道の宗教発達史的研究』（一九三五）、『神道精義』（一九三八）がある。彼の宗教学的神道学は、神道を宗教の専外に置く同時代の公的見解とは相容れず、また「神人同格」を根本に置くその神道論に、賛同する者はそう多くはなかつた。ただそのいっぽうで彼は研究組織として明治聖德記念学会を設立、『神道書籍総目録』（一九三八）の編纂等を行つた。

田中は東大文学部哲学科に学び、指導教官だつた井上

哲次郎の影響を受けて神道に目覚め、神道の哲学的研究を開始する。『平田篤胤之哲学』（一九〇九）、『神道本義』（一九一〇）、『本居宣長之哲学』（一九一二）等を矢継ぎ早に上梓、神道学者として知られた存在となつた。

また、宮地は東大国史学科の出身で、内務省神社局に入り神社行政を担当するいっぽう、皇典講究所等で神祇史を講じ、大正七年からは東大でも講義を始めていた。彼の姿勢は国史学の一分野として「神祇史」の確立を目指すもので、加藤や田中の「神道学」とは一線を画すものだつた。熊野、八幡、諏訪その他についての優れた個別研究のほか、通史的著作として、『神祇史綱要』（一九一九）、『神祇史の研究』（一九二四）、『神祇史大系』（一九三二）、『神道思潮』（一九四三）等があり、またその講義

録は『神道史』として、死後刊行された（一九五六）（六三）。その他講師として山本信哉（一八七三）（一九四四）、小林健三（一九〇三）（一九八九）等がいた。山本は神道文献学者として『古事類苑』『大祓註釈大成』『帝室制度史』の編纂に従事した。小林は近世神道の専門で『神道史の研究』（一九三四）、『垂加神道の研究』（一九四〇）がある。

小林の師が平泉澄（一八九五）（一九八四）で、国家主義の代表的イデオローグとなつていく。

このほかの官立大学では、京都大学にあつては西田直

二郎（一八八六～一九六四）が、その提唱する日本文化史学の一環として神道を論じた。また、京大国史出身の清原貞雄（一八八五～一九六四）は京大図書館の司書を経て広島高等師範の教授になつたが、神道の古代から近代に至る通史として『神道沿革史』（一九二〇）、その増補版たる『神道史』（一九三五）を著した。そして大正一二年に東北大大学法文学部において日本思想史の講座を開いた村岡典嗣（一八八四～一九四六）は、早く明治四四年に『本居宣長』を上梓し、その後も宣長、平田篤胤、垂加神道、「古神道」などについての論文を執筆している。<sup>〔6〕</sup>

官立大学制度の外部で「神道」研究を担つたのが神職養成機関である。明治一五年（一八八二）に設立されたのが皇典講究所、その教育部門として明治三年にできたのが國學院であった。また、伊勢にも明治一五年に神宮學館が作られ、これらの卒業生のなかから、戦前・戦後を通じて神道研究の中核を担う研究者が輩出することになる。戦前ににおける代表的存在としては、皇典講究所出身の佐伯有義（一八六七～一九四五）、國學院出身の河野省三（一八八二～一九六三）が挙げられる。佐伯は『古事類苑』『神祇全書』などの編纂に従事した。また神道最大の辞典である『神道大辞典』（一九三七～一九四〇）を監修したのは、宮地とこの佐伯であった。河野は國學院

学長となり（一九三五～四二年）、『神祇史要』（一九一五）、『国民道德史論』（一九一七）、『神道大綱』（一九二七）、『神道の研究』（一九三〇）、『国学の研究』（一九三一）など、神道・国学及び国民道德論、国体思想に関する多くの著作を著した。

昭和に入り、国家主義の台頭に伴い国体明徴運動が盛んになった結果、各大學に日本思想史、日本精神史の学科・講座が設置されるようになる。京大の日本精神史講座、東京文理大の日本思想史講座、広島文理大の日本国體学教室が開かれ（一九三七年）、神宮皇學館は官立学校に昇格する（一九四〇年）。またこのころ作られた研究機関に大倉精神文化研究所（一九三二年）がある。ここでの事業として神道のバイブルたらんと意図して『神典』（一九三六年）の編纂が行われた。ちなみに、戦後も精力的な研究を続けた西田長男・近藤喜博（後述）はその所員であった。また同年に国民精神文化研究所が設立され、「国民精神文化文献」として、『日本書紀纂疏』『日本書紀抄』『唯一神道名法要集』『吉見幸和集』『藤原惺窓集』などを刊行した。

なお、国学に出自を持つ国文学、国史学、国語学の研究者の多くも状況に寄り添うべく、神道・国学と関連する研究を行ふようになる。平泉澄や彼と並ぶ国

家主義の鼓吹者だった国語学の山田孝雄（一八七三～一九五七）は、いうまでもないことであらうが、その他にも麻生磯次『宣長の古道觀』（一九四四）、荒木良雄『賀茂眞淵の人と思想』（一九四三）、久松潛一『万葉集に現れたる日本精神』（一九三七）、同『国学——その発生と国文学との関係』（一九四二）などが例として挙げられよう。

しかし、敗戦とともに、神道関連の教室・講座は東大をはじめとして廃止、皇學館に至っては廃校となり。平泉・山田・河野など状況に深く関与した者たちは公職を追われることになった。歴史・文学・哲学・倫理学・宗教学等諸分野にまたがる「神道」研究の黄金時代はかくて終焉を迎えたのである。

## 二、本地垂迹と中世神道の復権

神仏分離と廢仏毀釈より始まつた近代神道にとって、神仏習合・本地垂迹及びその教理化たる中世神道は批判的に取り上げられるとしても、積極的に評価すべきとは当初考えられなかつた。その事情は仏教界も同じで、神仏習合的なるものは旧幕時代の遺物と認識されていた。そのようななか、神仏習合・本地垂迹の再評価の口火を切つたのが、東大国史の教授だった辻善之助（一八七

七～一九五五）が明治四〇年に、『史学雑誌』誌上に六回にわたり分載した「本地垂迹説の起源について」である。<sup>(8)</sup> 彼は史料を博搜して、神仏習合から本地垂迹、さらにその延長線上に中世神道を置き、神仏の融和的関係こそが日本文化の伝統であったことを描きだそうとした。

このことと関連して辻は、明治初年におきた廢仏毀釈の実態を記録しておくことの必要性を強く感じていた。同僚（印哲）の村上専精（一八五一～一九二九）、東洋大学教授の鷺尾順敬（一八六八～一九四二）と編纂した『明治維新神仏分離史料』（一九二六～二九）がその成果であり、この史料集によつて、廢仏毀釈の全體の輪郭を今日でも知ることができるるのである。

神仏習合・本地垂迹及び中世神道を肯定的に捉え直そうとする傾向は、その後仏教学・仏教史学にも飛び火し、大正の末年から昭和十年代にかけて、仏教学者による神道研究が陸續として発表された。ただこれは前章で述べた国体明徴運動に伴う神道教育、研究の隆盛と軌を一にするもので、状況へのアンガージュの一種といえなくもない。ともあれ真言宗の田中海応、水原堯栄、大山公淳、櫛田良洪、天台宗の鎌田良賢、田島徳音、稻慈弘、淨土宗の嵐瑞澂、高瀬承嚴、藤本了泰、曹洞宗の鈴木泰山といつた宗学者たちがこの時期、集中的に自宗の神祇信仰

や神道説に関する論考を出している。<sup>(9)</sup>

これら仏教学者と神道学者の間で対立する論点が、中世神道についての評価である。西田直一郎「神道における反本地垂迹思想」（『芸文』九一一、一九一八年）、平泉澄「神仏関係の逆転」（『歴史教育』二一四、一九二七年）、西田長男「本地垂迹説の終末に就いて」（『歴史地理』六九一八、一九三六年）など神道（史）学者たちはおしなべて中世神道における反本地垂迹説の意義を強調し、反仏教的近世神道の前史として、中世神道を位置づけた。それに対し仏教学者は、反本地垂迹説も結局は神仏融合思想の一種に過ぎないと主張した（たとえば島地大等「日本古天台思想の必要を論ず」『思想』六、一九二六年）。

中世神道の問題については、国史関係の学者も参入している。早くは辻善之助が前掲論文において、本地垂迹思想の展開のなかで両部神道等について言及しているが、辻の同僚である三浦周行も「法華神道の伝統に関する新研究」（『史学雑誌』二三一、「一九一二年）を発表している。その後で注目すべきが、九州大学国史学教室の初代教授となつた長沼賢海（一八八三—一九八〇）の研究で、「建武前後の神仏の信仰関係」（『史淵』六、一九三三年）、同「法華念仏兩宗の展開と唯一宗源神」（『史淵』九、一九三四年）、同「神道に現はれたる他力念仏の影響」（『史淵』一五、一

九三七年）は今なお参考するに値する。なお、長沼には福神信仰に関する優れた業績があり、その論考は『福神研究——恵比須と大黒』（二九二二）、『日本宗教史の研究』（一九二八）に収められる。

さらに、ここで特に採り上げておきたいのが鏡島寛之である。遺憾なことにこの人物のことはよく分らない。駒澤大学出身で、昭和十年代に母校で教えていた。仲間とともに昭和一一年『文科』という同人誌を作り、一四年まで続けた。その間応召されるも、一九四一年までは論文を発表している。戦後の論考は全くなく、後の消息は不明である。現在確認できる彼の論考は次の通り。

「中世に於ける神仏関係の動向——反本地垂迹説を中心として」（『駒澤大学仏教学会年報』七、一九三六年）／「根本花実論と聖徳太子信仰——中世神仏関係の一素描」（『文科』一七、一九三六年）／「中世に於ける仏教理念の神道論的展開」（『駒澤大学仏教学会年報』八、一九三八年）／「中世に於ける寺院僧侶の神典研究」（『文科』三一三・四、一九三八年）／「過去七仏と古典の神々——年代的神本仏逆説の一考察」（『財團法人明治聖徳記念学会紀要』五四、一九四〇年）／「中世仏教徒の神祇觀とその文化」（『宗教研究』二一四、一九四〇年）／「神仏関係における法性神の問題」（『宗教研究』三一三、一九四一年）

根本枝葉花実説、中世寺院の神書研究、法性神の問題など、特に一九八〇年代以降に注目されるようになる中世

神道における重要なトピックが取り上げられており、その先見性に驚かされる。

『文科』三一三・四号（奥付、昭和二三年四月）は「神道文化特輯」で、右の鏡島論文のほか、飯田利行「皇太神宮儀式帳に残れる古韻」、岡本正道「伊勢神道の支那思想的背景」、吉田良英「中世歌謡に現れたる神仏混淆思想觀」、菊池良一「中世神明説話の考察」が並ぶ。この号で注目したいのは「最近の神道史研究」として、昭和初年からその頃までの神道史の研究状況が詳しく記されていることである（執筆者名義は「編輯部」）。冒頭部分を次に引いておく。

現に見る如く、神道を繞ぐる諸問題は近時日本精神論の白熱的高唱と共に漸く頻繁喧騒になりつゝある。そして殊にこの最近の我国の種々なる国家事情は、必然嫌が上にも「神道」と「時局」を結びつくるに急である。従つて例へば日本精神と神道とか、或は所謂惟神の道とか、さうした一類の書の氾濫は

實に尋常ならず全く目ぐるましい迄に絢爛そのものである。然しひらこのレヴューの如き華やかさは決して学的な保証、確實に基づいて演出されてゐる

のではない。

言ふ迄もなく神道は日本民族精神文化の最先頭を占むべきものである。だが、少くとも現在、神道の學的な地位が必ずしもさうではない事實を遺憾とする。殊にわけても、神道問題の有ゆる前提基礎ともなるべき神道史の研究水準は歴史学の他の分野に比して著るしく低位にある。手近い話が、一見表面的には神道史の研究の如く見え又實際<sup>(マヤ)</sup>しかく自称してゐるものは極めて数多きに上つてゐるが、いかんせん、事実それらの大半は殆ど國民道德史であつたり或は情熱だけで書き下された空虚な国体論の如きものであつたに過ぎない。（中略）如何に神道史の研究がこの国の特殊な国体的事情の制約によつて卒直自由な研究を持ち得ないとは言へかゝる現下の神道史研究の貧困状態は余りにもなきない。我々はそこで、かうした神道史研究の不振が何に由来してゐるか、又今後如何にしてかやうな沈滯から脱却して新しい打開進展を遂げべきか一倍の検討熟慮を期せねばならぬ。（後略）

このように「神道」研究の持つ後進性を自覚し、状況的限界を甘受しつつも、その學問的進展を模索する。それを阻害するものが、「國民道德史」であり、「平泉

ミズム」に基づく「國士家らしい研究」である（文中の表現）。たとえば先に言及した本地垂迹と反本地垂迹に関する諸論に関して、「功罪論の判決を説くに急なる為めか、或は必要以上のこだわりによる為めか、所謂歴史研究の本道から外れた」ものも多いと批判する。そして社会経済史的立場から本地垂迹の現実的な運用過程を見ようとした研究（圭室諦成「中世に於ける新宗教の伝道について」『宗教研究』新一一一四、一九三一年等）に新しい可能性を見る。また、次第に発展しつつあつた中世神道の研究状況を解説、先に触れた長沼の諸論文や鈴木三郎「神道理論の展開」（『史潮』六一三、七一二、一九三六・三七年）が

高く評価されている。そして、當時進行中で、戦後になつて『日本の神道』（後述）としてまとめられることになる津田左右吉（一八七三～一九六一）の神道論（「日本の神道に於ける支那思想の要素」『東洋学報』二五一～一九）や原田敏明（一八九三～一九八三）の古代宗教研究に期待を寄せている。

おそらく執筆者は鏡島が中心だったと思われるが、神道史学の「新しい打開進展」への期待もむなしく、時勢は悪化の一途を辿つた。鏡島も含め、『文科学会』会員の多くも入當している。<sup>10</sup> そして、同人・執筆者に名を連ねる者で、戦後も論文・著作を公表している者は菊池良

一（中世文学）・戸川安章（修驗道）・飯田利行（漢文学）くらいしか見いだせないのである。

### 三、戦後の「神道」研究

戦前には人文学諸分野に拡がつていた「神道」研究は、敗戦後はこれらからほぼ排除され、神道関係者の「宗学」となつた。もちろん記紀や古代祭祀・儀礼は国史学や国文学で研究の対象とはなるが、研究者のスタンスが右にあるにせよ左にせよ、政治史や制度史あるいは古代文学の範疇で扱われ、そこに「神道」が前景化することはなかつた。また、国学は思想史において重要な研究対象であり続けるが、戦前のように神道史というコンテキストで捉えられる事はない。つまり「神道」という問題系は、ある閉じられた領域において、閉じられた研究者集団によつて行われる学問となつたのである。

一九五〇年代から六〇年代のかかる状況下において、特に「神道史」の分野で、注目しておきたい研究者として、河野省三、西田長男（一九〇九～八二）、近藤壹博（一九一一～九七）、岡田米夫（一九〇八～八〇）、久保田収（一九一〇～七六）が挙げられる。

河野省三は戦前は国体思想に関わる大袈裟な著作を多

くものではいたが、元来、國家・天皇に収斂していかない民間の神道言説や信仰にも広い知識を持つ研究者であつた。その成果が戦後の著作に現れる。『先代旧事本紀大成經』に関する総合的研究書である『旧事大成經に関する研究』（一九五二）と、国学の台頭によつて排除されていった近世の「通俗」神道の諸相を通覧した『近世神道教化の研究』（一九五五）である。いずれもそれまでに類書なく、以後もこれらを越える書は出ていない。

西田長男は宮地直一の薰陶を受けた堅実な文献実証主義を基礎とし、また中村元など仏教学者との交流もあつた視野の広い研究者であった。しかも多産で、古代・中世・近世の神祇信仰・神道説に関する夥しい論考がある。

その成果の一部は、一九四〇年代から六〇年代にかけて『神道史の研究』（一九四三）、『日本古典の史的研究』（一九五六）、『日本宗教思想史の研究』（一九五六）、『神道史の研究第二』（一九五七）、『神社の歴史的研究』（一九六〇）としてまとめられた。さらに、一九七八年から七九年にかけて、『日本神道史研究』全一〇巻が刊行された。これは既に単行本収録済のものも含め、代表的論考を集約したものだが、その多くには詳細な追記・補記がある。

近藤喜博は文化庁の調査官として、さまざまな文献調査に関わったが（特に名古屋の七寺の調査報告は重要）、同時

に古代・中世の神祇信仰に関わる多くの論文を発表した。著作に『古代信仰研究』（一九六三）、『日本の鬼』（一九六六）、『日本の神』（一九六八）、『家の神』（一九八二）などもある。また『神道集——東洋文庫本』（一九五九）、『神道集——河野本』（一九六二）、『神道集——赤木文庫本』（一九六八）によつて『神道集』研究の基礎を築き、その編集中にかかる古典文庫『中世神仏説話（正・続・続々）』（一九五〇、一九五五、一九七二）は後の中世日本紀を先取りするようなラインナップの資料集となつていて。彼の数多い論考は未だ集成されていないが、その全貌は『伝承文学研究』第四七号（近藤喜博追悼号、一九九八）により知り得る。<sup>①</sup>

岡田米夫は長く神宮司庁にあつた人で、戦前・戦後を通して、伊勢神宮・伊勢神道を中心に、重要な論考を発表した。戦前の業績としては今なお資料集として価値の高い『建武の中興と神宮祠官の勤王』（一九三五）の事実上の編纂・執筆者であり、これも貴重な『南山遺芳』（一九三五）にも深く関わっている。その代表的論文は『岡田米夫先生神道論集』（一九八二）に収められる。

久保田収は、東大の国史出身で、戦前は京都新聞に勤めていた。昭和二五年（一九五〇）「藝林」を創刊、次いで神道史学会の設立に関わる。その間、従来より手薄で

あつた中世神道の研究を開始、特に高野山大学に赴任したことで、その大学図書館に蔵する多くの両部神道関係書を発掘・涉獵した。その成果が『中世神道の研究』（二九五九）である。本書は中世神道の歴史に関する統一的に論じたはじめての著作で、現在に至るまで当該分野の基軸的研究書としての価値を失っていない。その後も、両部神道や八坂神社関係で重要な論考を著し、それらは『神道史の研究』（一九七三）、『八坂神社の研究』（一九七四）、『神道史の研究 遺芳編』（二〇〇六）に収められている。

そのほか神道史学者ではないが、研究史上で重要な存在として津田左右吉、村山修一（一九一四～二〇一〇）、萩原龍夫（一九一六～八五）を挙げておく。津田の広範なる学問を特徴づけていたのは日本文化は中国文化とは本質的に異質であり、どれほど移植されようとも、根本的な部分において影響を受けなかつたということを貫して主張し続けていた点にあつた。そのことをコンパクトにまとめたのが岩波新書の一冊として出された『シナ思想と日本』（一九三八）で、これは大東亜新秩序などと称して、東アジア世界の文化的一体性を強調していく時局にあつては、まさに反体制的著作であった。そして、昭和二三年に刊行された『日本の神道』は、神仏習合、中世神道、儒家神道などを子細に検討し、中国思想及び仏教

思想を取り込んだこれらの神道がいかに民俗風習としての神の信仰とは相容れぬものだつたかを論じたもので、彼の持論が戦前・戦後を通じて変らなかつたことをよく示している。

村山修一は西田直二郎門下で、文化史研究の分野から神仏習合の問題に取り組んだ。早くも昭和一七年に『神仏習合と日本文化』を出版している。同書は戦時下に出たにも拘わらず、国体主義的主張が殆ど見られないことが特徴で、神道美術（神像・宮曼荼羅・絵巻物）、唱導・表白・講式への習合思想からの注目など新見に富む。戦後に同じテーマについて再度まとめたのが『神仏習合思潮』（一九五七）、『本地垂迹』（一九七四）である。これらの著作は、いずれも神仏習合が形成される社会・経済的背景や思想史的ダイナミズムを追究していくのではなく、ひたすら叙述していくというスタイルである。しかし、そのいっぽう文学・芸能・絵画など多方面なジャンルとの関わりについて記述されており、神仏習合文化の眺望を得るに極めて有効といえる。彼は息の長い研究者で、最晩年に至るまで、神仏習合、修驗道、陰陽道等に関する多くの著述を出した。

萩原龍夫は柳田国男、肥後和男、和歌森太郎の熏陶を受け、歴史学と民俗学とにあいわたる大きな業績を残し

た。なかでも大きな仕事が肥後を受け継ぐ宮座研究で、その成果は『中世祭祀組織の研究』（一九六二）に結実した。同書は補論として祭祀組織という観点から伊勢神道と吉田神道についてのまとまつた通史が収められている（二五四頁にわたる）。これは歴史学からの厳密な史料批判に基づく中世神道研究であり、特筆に値する。またその後に出した『神々と村落』（一九七八）にも、中世の伊勢神宮をめぐる重要な論考が収められる。<sup>12)</sup>

いっぽう仏教学、仏教史の分野についてだが、戦前の佛教系神道への関心はほとんど失せた。そのなかで戦前と変わらず研究を続けていたのが大山公淳（一八九五）一九九二）と櫛田良洪（一九〇五～八〇）である。大山は敗戦の前年に『神仏交渉史』を上梓していたが、戦後もしばしば密教系神道に関わるいくつかの論文を執筆している。櫛田は千頁を越える大著『真言密教成立過程の研究』（一九六四）のなかで、戦前から続けていた金沢文庫所管の神道資料に関する研究を元に「神道思想の受容」として一章を設け鎌倉時代の両部神道の研究を、さらに『続真言密教成立過程の研究』（一九七九）のなかで、東寺宝菩提院所蔵資料に基づいて、室町時代の神道灌頂の研究を行っている。天台宗では、宗学研究の一環として、三崎良周（一九二一～二〇一〇）のような若い世代による山王

神道の研究が始まる。<sup>13)</sup>ただしこの動きが本格するのは一九八〇年代以後のことである。

さて、六〇年代のおわりから七〇年代以降になると、神道をめぐる研究に大きな変化が見られる。まず、高取正男（一九二六～八二）による「神仏隔離」論である。高取は、「神仏習合の起点」（藤島博士還暦記念論集『日本淨土教史の研究』平楽寺書店、一九六九年）、「廢仏意識の原点」（『史窓』二七、一九六九年）等の論考において、神觀念の変化の過程で神仏習合の進展に伴う反作用として「神仏隔離」意識が生み出されたとする。それを神祇信仰の自覺化<sup>14)</sup>、「神道の成立」ととらえたのが、一九七九年に出た彼の『神道の成立』である。「神仏隔離」論は、神仏習合の継続的かつ広範囲に浸透したにも拘らず、神祇信仰（神道）が独立性を保持し得た理由を説明するための重要な概念として受け継がれていく。

中世史家である黒田俊雄（一九二六～九三）は中世の宗教体制の基本を顯密仏教の中核として成り立つていると捉えた。所謂の顯密体制論である。これに基づき神道についても「中世宗教史における神道の位置」（家永三郎教授退官記念論文集刊行委員会編『日本古代・中世の仏教と思想』三省堂、一九七九年）、「日本宗教史上の「神道」」（『王法と仏法』法藏館、一九八三年）において、中世の顯密仏教体制

下では、「神道」とは仏の化導・化儀のあり方のひとつに過ぎなかつたと主張した。つまり飽くまで仏教の従属的存在として「神道」(ニ神々)が認められていたのであつて、独立した宗教ではなかつたというのである。そして、それが〈民族的宗教〉になつていく過程として、伊勢神道から吉田神道への流れを示した。

そして「中世日本紀」研究である。そのはじめは、謡曲の専門家である伊藤正義(一九三〇—一〇〇九)が、昭和四七年(一九七二)、岩波の『文学』に発表した「中世日本紀の輪郭——太平記におけるト部兼員説をめぐつて」であった。伊藤は、中世において「日本紀」と称する内容が『日本書紀』のみを指すのではなく、神祇及び日本の起源に関する言説を指す呼称として流通していた実態を明らかにし、これを「中世日本紀」とよんだ。「中世日本紀」論は、一九八〇年代前後より、主として日本文学研究者を中心に継承・展開され、説話文学・唱導文学・文藝注釈からの関心を基点とする研究が進められた。これらの特徴は、「中世日本紀」の名の下に、神道史研究者が扱ってきた狭義の「神道書」より広い、説話・軍記・和歌注釈・仏典注釈などを対象にしていることで、その結果、中世文化・文芸史のより広い文脈のなかで、この問題が論じられるようになつたのである。

#### おわりに

八〇年代以降の「神道」に関する研究は、右に見た動きを軸に、大きく展開していくことになる。今回殆ど触れ得なかつた近世についても、近世神道の問題が思想史や近世文学研究のなかで拡がりつつある。<sup>〔註〕</sup>

いっぽう神道(史)学内部では、近世神道を中心的に、若い世代による重厚な研究書が特に九〇年代以降増えていく。そのこと自体は喜ばしいことではあるが、前代と同様に神道史的問題意識が先に立ち、必ずしも周辺分野との連携がうまくいっていないようにも思える。

仏教の場合、各宗の伝統のなかで学問世界が構成されている宗学では、宗外の人間は基本的に排除されている。しかし他方で印度学仏教学会や日本仏教学会のような各宗学を統合する学会や、仏教史学会・仏教文学会等宗学とは関係のない研究者が多く参加している学会もある。

以上、三つの新しい潮流はいずれも、神道(史)学ではなく、文化史、中世史、日本文学研究という外部から起こってきた動きである。「神道」は戦前とはまた違うかたちで、多くの分野の研究対象となる条件が整えられたといえよう。

それに対し、神道学の分野は、宗教学会や日本思想史学会のように、文献研究の基軸である日本文学や日本史とは疎隔がある。その背景には、これらの分野での神信仰や文化への関心が「神道」という形で括られてはいないこと、神道関係者が今なお抱えている国家・天皇への特別な意識を共有できないことがある。

しかしながら、本稿で述べてきたように、少なくとも閉じられた研究分野という環境が変化しつつあることも事実で、今後多分野間の学問的交流がより活発化するとが期待されるところである。

### 注

- (1) 島蘭進・磯前順一編『東京帝国大学神道研究室旧蔵書・目録および解説』(東京堂出版、一九九六年)、藤田大誠『近代国学の研究』(弘文堂、二〇〇七年)。
- (2) 島蘭進『加藤玄智の宗教学説的神道学の形成』(明治聖徳記念学会紀要)復刊一六、一九九五年)、同『加藤玄智』(島蘭・磯前順一編著)。
- (3) 磯前順一「近代神道学の成立——田中義能論」(磯前順一『近代日本の宗教言説とその系譜——宗教・國家・神道』岩波書店、二〇〇三年)。
- (4) 磯前順一「宮地直一の神社史——『熊野三山の史的

研究』について」(磯前順一著)、遠藤潤「宮地直一」(島蘭・磯前順一著)。

(5) 今谷明「平泉澄」(今谷明・大濱徹也等編『20世紀の歴史家たち』(刀水書房、一九九七年)、阿部猛『太平洋戦争と歴史学』(吉川弘文館、一九九九年)、若井敏明『平泉澄——み国のために我つくさむ』(ミネルヴァ書房、二〇〇六年)等。

(6) それらの論考は『日本思想史研究』(増訂・統・第三・第四) (岩波書店、一九四〇、一九三九、一九四八、一九四九年)、『神道史日本思想史研究』(創文社、一九五六年)等に収められている。

(7) 特に久松潜一については、安田敏朗『国文学の時空——久松潜一と日本文化論』(三元社、二〇〇一年)参考照。

(8) 『史学雑誌』一八一四・五・八・九・一二。この論考は辻『日本佛教史研究』第一巻(岩波書店、一九八三年)にまとめて収められているほか、その増補されたものが、辻の主著『日本佛教史』第一巻・上世編に組み込まれている。

(9) 田中海応「真言宗より見たる両部神道史考」(『大正大学学報』二七、一九三七年)、水原堯栄「高野山の神道」(『中外日報』一一一七二〇一二三九、一九三六年)、(三七年)、大山公淳「仏教と密教との交渉に就て」

（『密教研究』六六、一九三八年）、同「密教神道の展開

——特に天地麗氣記に就いて」（『密教研究』七九、一九四一年）、『神仏交渉史』（高野山大学、一九四年）、

櫛田良洪「鎌倉時代の金沢称名寺と両部神道との交渉」（『大正学報』二七、一九三七年）、鎌田良賢「乘因の一実神道説」（『山家学報』新一一四、一九三一年）、同「山王神道と伊勢神道との交渉——特に慈遍の学説を中心として」（『大正大学学報』二〇、一九三五年）同

「一実神道に於ける僧慈遍の学説」（明治聖徳記念学会紀要）四六、一九三六年）、田島徳音「山王神道と一実神道」（『大正大学学報』二七、一九三七年）、裕慈弘「中世比叡山に於ける記家と一実神道の発展」（『大正大学学報』一一・二三三、一九三五年）、藤本了泰「問師の麗氣記私鈔並に同拾遺鈔に就て」（『鴨台史報』一、一九三三年）、同「中世に於ける淨土宗と神祇に淨土宗の神道論について」（『大正大学学報』二七、一九三七年）、嵐瑞澂「淨土宗神道論史の一考察——特に神道書に就て」（『鴨台史報』七・八、一九四一年）、高瀬承嚴「麗氣記私抄・麗氣記拾遺抄」（森江書店、一九三三年）、鈴木泰山「洞内に於ける本地垂迹説の撰取確認」（『道元』七一六、一九四〇年）、同「禪宗の地方發展」（畠傍書房、一九四二年）。

(10) 「文科」には、そのときの日誌等も掲載されている。

たとえば鏡島寛之「白い通信」、和田徹「練兵雑記」（『文科』四一、一九三九年三月）。

(11) 物故した神道関係者について、網羅的に拾っている國學院大學日本文化研究所編『神道人物研究文献目録』（弘文堂、一二〇〇〇年）には、なぜか近藤の項がない。

(12) 萩原の業績等については、萩原龍夫旧蔵資料研究会編『村落・宮座研究の継承と展開』（岩田書院、一二〇一年）参照。

(13) 三崎「山王神道と一字金輪仏頂」（『印度学仏教学研究』八一、一九六〇年）、『神仏習合思想と悲華經』（同前九一、一九六一年）等。何れも『密教と神祇思想』（創文社、一九九二年）所収。

(14) 高取『民間信仰史の研究』（法藏館、一九八二年）所収。

(15) ここでは近世文学研究で神道周辺に関心を向けている例として中村博保『上田秋成の研究』（ペリカン社、一九九九年）、西田耕三『人は万物の靈——日本近世文学の条件』（森話社、一二〇〇七年）のみ挙げておく。

（茨城大学教授）